シート　の　　第　　学年　　組　　番　名前

※　解答は、《解答らん》に書きましょう。

松本さんのクラスは、テレビ会議システムを利用した交流学習に取り組んでいます。今回の相手校は、青森県の小学校です。松本さんのグループは、新居浜市の東平地区をしょうかいすることとし、次の取材計画を立てました。

【取材計画】

取材する内容	分担	資料の集め方
今の東平について	松本・田中	新聞・インターネット・現地でのインタビュー取材
東平の歴史について	大木・野村	新聞・リーフレット

松本さんと田中さんは、東平地区で行ったインタビュー取材をもとに、次の資料Ａをまとめました。また、大木さんと野村さんは、次のページ、資料Ｂの新聞記事を用意しました。

【資料Ａ】

観光施設を運営するＯさん

「東平は今、『ツアー』といって団体で旅行するお客さんを中心に、大いににぎわっています。旅行雑誌では、『四国のインカ帝国』『東洋のマチュピチュ』『天空の産業遺産』などとしょうかいされています。これまで東平は、主に他の観光地への行き帰りに立ち寄るだけの場所でしたが、今や観光の中心になりました。」

旅行代理店のツアーガイドＴさん

「東平の観光資源としての価値の高さにまっ先に目をつけたのがわが社です。来島海峡の潮流体験などと合わせて、一泊二日のツアーをスタートさせたところ、『四国で最も人気の高いツアー』と言われるほどになりました。」

県外からの観光客Ｈさん

「森の中に突然、古い建物が現れたり、近づくと、見上げるほどの大きさの建物が残っていたりして、圧倒されました。また、霧が出て、幻想的な雰囲気が楽しめました。」

観光ガイドのＹさん

「数年前から東平の価値を発信してきました。①やっと注目されるようになり、ありがたいと思っています。②もっと多くの人に東平のすばらしさを知ってもらい、市民でこの遺産を守っていきたいです。」

【二ページ】

【資料B】

新居浜市内から旧別子山村方面へ車で四十分ほど走ると、「東平」とよばれる地域がある。この地域は、近年、「マインドピア別子・東平ゾーン」として整備された。わずかに残る建物の跡が、昭和初期、ここに別子銅山採鉱本部があったことを物語っている。

東平の開発は、一九〇二（明治三十五）年に始まった。

東平地区に、銅をふくんだ石を運ぶための輸送路が開通したことをきっかけに、労働者用の住宅の建設が進み、工場や小学校、※娯楽場などが次々と完成した。

一九一六（大正五）年には、街の最盛期をむかえる。

東平生まれの東平育ち、新居浜市の上松さんは、「人情味あふれる、いい街でした。せまい※長屋住まいで、住人は家族も同然。困っている人がいたら、みんなで助け合いました。市街地から離れていましたが、生活物資に困ることはなく、大阪から有名な歌舞伎役者が毎年やって来るなど、娯楽も充実していました。」と、当時をふり返る。

同じく新居浜市に住む長田さんは、「小学校の理科室に、ものすごい数の標本があったことを覚えています。音楽室には、トランペットやクラリネットなどの楽器もいっぱい。当時あれだけのものがそろっていた学校はなかったのではないでしょうか。」と話す。プールやスキー場もあった。

そんな山の生活に、戦後、※合理化の波がおし寄せる。東平は、もともと石の質が悪かったうえ、戦時中たくさん石をとり過ぎたことが※閉山の時期を早めた。

一九六三（昭和三十八）年には合理化策が発表され、百五十人近い若者が山を下りることとなった。大野さんは、地中からほり出した石を外へ運び出す仕事をしていた。「昔は、何台もの台車に労働者を乗せて※入坑したのに、最後には、四台でじゅうぶん過ぎるほどだった。わずかな台車で入坑したときのさびしさは、今でも忘れられません。」

そして、一九六八（昭和四十三）年、閉山。東平は、六十六年の短い歴史を終えた。全盛期に約四千人いた住人も、一割以下の三百七十人に減っていた。

上松さんは、閉山処理を担当し、山を下りる労働者たちを見送った。「ここで一生過ごしたかったのに……、とつぶやくお年寄りや、※名残おしそうに山を見上げる子どもたちの姿を見ました。みんなの不安やさびしさを思うと、なみだがあふれました。」

翌年には、ほとんどの施設が※解体された。

※　娯　楽…労働の合間に、何かをしたり、見たり、聞いたりして遊ぶこと。

※　長　屋…一つの建物をいくつかに区切って、たくさんの家族が住めるようにした家。

※　合理化…企業などが、仕事の効率を上げるために、原材料や労働者を減らすこと。

※　閉　山…山から石をほり出す活動を止めること。

※　入　坑…山の内部にほられた通路に入ること。

※　名残おし…別れようとしても、なかなか別れることができない。

※　解　体…もとの形をとどめないように、取りこわすこと。

【三ページ】

松本さんたちは、集めた資料をもとに、青森の小学生に伝えたいことをまとめました。次のメモは、その一部です。

【メモ】

松本

○　旅行雑誌にのっている「四国のインカ帝国」「東洋のマチュピチュ」「天空の産業遺産」という呼び名を使うと、東平のイメージがよく伝わると思う。

大木

○　今は、ひっそりとした山の中に、一時期、約四千人もの人たちが生活し、さまざまな施設があったことを伝えたい。

野村

○　東平地区で石をほり出していた期間は、わずか六十六年。

○　そこで暮らしていた人たちが、今も、東平への熱い思いをもっていることを伝えたい。

田中

○　観光客が語った、「霧が出て、幻想的な雰囲気が楽しめる」ことを伝えたい。

○　「幻想的」は、むずかしい言葉だが、次の写真を見てもらうと、少しは分かってもらえると思う。

松本さんたちは、メモをもとにして、次の話し合いをしました。

【話し合い】

松本　今日の編集会議では、発表原稿の作成に向けて、これまでに取材した内容を確認しながら意見を出し合います。

野村　最初に、東平がどんな場所かをイメージしてもらうことが大切です。そこで、はじめは、（　X　）さんのメモを使って、耳と目にうったえるとよいと思います。

大木　（　Y　）さんのメモの三つの言葉は、東平のイメージを広げるのにぴったりの言葉だと思います。ただ、残念ながら、説明を加えないと分かりにくい言葉があるので、再取材をする必要があります。

田中　（　Z　）さんのメモにある、東平地区六十六年の歴史は欠かせないと思います。それをしょうかいするときに、歴史をまとめたパネルを表示してはどうでしょうか。

【四ページ】

一　【資料Ａ】の――線部①「やっと」、②「もっと」を、意味を変えないようにして、別の言葉にします。ふさわしい言葉を考えて書きましょう。

二　【話し合い】の（　　）ＸからＺに当てはまる人物名を、それぞれ漢字で書きましょう。

三　【話し合い】の――線部「歴史をまとめたパネル」について、野村さんは、次の下書きをしました。ところが、松本さんが【資料Ｂ】の内容と照（て）らし合わせたところ、書きまちがいが二つありました。【下書き】から、まちがいの部分をぬき出して、修正（しゅうせい）しましょう。

【下書き】

東平地区６６年の歴史

１９０２（明治３５）年
東平の開通が始まる。

住宅が増え、工場や学校が建つ。

１９１６（大正　５）年
最盛期をむかえる。
　　○　住人：約４００００人
娯楽がじゅう実。
学校の物品や施設もじゅう実。

１９６３（昭和３８）年
合理化策の発表。
１５０人近くの若者が山を下りる。

１９６８（昭和４３）年
閉山。
　　○　住人：３７０人

シート　９　解答らん

第　　学年　　組　　番　　名前

一　①

二　②

X

Y

Z

三

《まちがい》

《まちがい》

↓

《修正》

↓

《修正》

【五ページ】

シート　9　正答例

一　①　ようやく、どうにか、なんとか　等

②　さらに、いっそう、より　等

二　X　田中　Y　松本　Z　野村

三　開通　↓　開発

40000人　↓　4000人